
Wandering Trip

瀬々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Wandering Trip

【Nコード】

N8227X

【作者名】

瀬々

【あらすじ】

文武両道、容姿端麗な幼馴染に放課後の教室で告白された。「俺勇者の生まれ変わりダカラーww」だっけ？ まかの痛い人カミングアウトに啞然としていたら、いつの間にか二人して異世界へ召喚され彼は勇者、私はその従者になっていた。っておいおい、旅の仲間が女ばかりかよ、なにこのハーレム。私の肩身がせまいよ！これは異世界に召喚された私と心配でついてきちゃった元勇者の、まったく手に汗握らないかもしれない物語である。

1、右腕に宿る邪神曰く。

「聞いてほしい、ことがあるんだ」

傾きかけの夕焼けに染まる教室で、彼がそう言ったとき、私はわかる人にしかわからないネタを散りばめつつ当番の学級日誌を渾身の出来に仕上げていたところだった。

いつものように二人で帰ろうと前の席に座って待っていた彼が、唐突に、どこか苦しそうな様子で話し出す。

開けたままの窓、スピーカーからかすかに流れてくる、下校を促す放送にせかされて、私はなかば聞き流すようにして作業を続けていた。

二人だけの静かな空間にシャーペンの音だけが響く。沈黙が拒絶ではないのはどちらもわかっていて、生まれたときからの付き合いは伊達ではない。

なかなか続きを口にしない彼を怪訝に思い、手を止めて顔を上げる。

目があった。

「俺さ、実は……………生まれてくる前に異世界で勇者やってたんだ」

時が止まった気がした。

フリーズののち再起動するも状態異常：混乱。

えーと冗談？ あまりおもしろくないけど。でも思いつきり真顔だな。あれ？ 目がマジだよこの人。あれ、私の幼馴染って実は痛い厨二病的な人だったのか。というかこの場合なんて反応返すのが正解？ 笑って合わせるべきか現実を諭すべきか、いやでももしこの衝撃の告白が彼のなけなしの勇気を振り絞ってなされた、一週間以上の精神的準備期間を経た上での彼なりのいぎよぶ、噛んだ、

偉業なのだったりしたら、ここは付き合いの長い幼馴染である私はその蛮勇をそつと汲み取りそして讃えるべきなのではないだろうか。例えそれが蛮勇でも。

などくだらない問題解決法が脳内でぐるぐるする。
とりあえず私は

「そ、そうなんだ」

と無難に流すことしかできなかった。どもったのは愛嬌ということ。
で。

なんともリアクションできない私に、彼は柔らかに笑って続ける。

「俺が小さい頃、超能力使えたのは覚えてる？」

問いかけてられて記憶を探るが覚えがない。
眉根を寄せた私に、今度は苦笑しながら。

「火を起こしたら親に火遊びだつて言いつけられるし、風を起こしたら人間扇風機とか言われるしで、僕結構シヨックだったんだけど」

そんなこと言われても覚えてないものは覚えてないので、それがどうしたと目を細めた。

「それ、魔法。前世から能力を引き継いだっばいんだよね」

「だから、それがどうした」

笑ってばかりで進まない会話の内容に少し苛々してきた。

ただ厨二の暴露がしたかっただけなら邪魔をしないで欲しい。なぜ長年隠してきた秘密を今日この日に伝えてきたのかは知らないが、

きつと右手に宿る邪神のお告げでも聞いたのだろう。今日は大安吉日だZ E 、とか。

そんな邪神とは全く縁のない私は、速く日誌を終わらせて家に帰り水戸黄門を見る。これは決定事項であり誰にも邪魔はさせぬ。語尾がおかしいのは決意の証。

「うん、それでさ、そっちの世界に君が喚ばれてるんだけど心配だからついてくね」

「……は？」

続けられた予想外な台詞にあっけに取られているうちに、私たち周辺の床が光りだした。

「そろそろ抑えられなくなってきたんだよね。大丈夫、だいたい俺がなんとかするから」

「いやいや、は？」

光がどんどん強くなっていき、疑問よりも眩しさに目をつむってしまう。

そうして、私だけがよくわからないままに私たちはこの世界からフェードアウトしたのだった。

光が収まった後の教室、残された日誌には走り書きで書きかけの文字。

『だれか今日の水戸黄』

光が消える間際までそれを書いていたシャーペンは、持ち主と共に姿を消していた。

2、耳をすませばほら

光はしばらくして収まったが、眩んだ私の目はすぐに機能回復とはいかなかった。

どうやら辺りは薄暗いようで、それが余計に目を馴れさせなくさせる。

ぱしぱしする目を擦り、何度もまばたきをした。

なんとか視界が落ち着いてきたところであたりを伺うと、目の前に幼なじみの背中。えっと……さっきまで貴方こっち向いてませんでしたっけ。

状況のつかめない背後の私を完全スルーして彼が低い声で言う。

「つまり、魔王を倒せば帰れると？」

な　ん　の　は　な　し　だ　。

ありがちなRPGみたいな話をしていた。正直ついてけない。

あつ私一般人なんで……という心境ではたと気付く。この人誰と会話してるんだ。

座ったままだった姿勢をそっと倒し、彼の横から正面を覗く。やたら白いひらひら衣装を着た、超絶美少女がそこにいた。うわああ眼福。

肌は白く、髪も白く、目はごく薄い水色。触れれば折れてしまいそうな華奢な体だが、瞳の光は強くしつかりとした芯を感じさせる美少女。それが、幼なじみの前でひざまづいていた。なぜ。

「召喚の魔法陣を通過した時点で、そのような契約となっております」

超絶美少女な彼女は明らかに日本人でない見た目にも関わらず、

幼なじみの目をしっかりと見つめ流暢な日本語でそう答えた。

「もし魔王が他人に討ち取られたり、病に倒れた場合はどうなる」

目の前の彼がやはり低い声で続ける。なにやら機嫌が悪いようで、自分に向けられた質問ではないのに怖い。でも病気に負ける魔王はないと思うな。

「魔王さえ倒れれば、契約は成されたと見なされます」

「用が終わったらさっさと帰れということか」

辛辣な切り返しに、ホワイト美少女さん（仮名）の表情が悲しげにくもる。

「リサクィアスフの勇者様には全く関係のないことと存じてあげております。しかしどうか、滅び行く私たちを哀れに思い、その御力を貸して頂けないでしょうか」

そう言って、彼女は私たちに向かって頭を垂れた。

そのリサなんとかって何？ とか聞きたいけどそんな空気じゃないくらいはさすがに読める。

重い空気になんとなく汗をかきつつ、ホワイトさんが下げた頭の向こうを見てようやくここが石造りの部屋であるのを知った。

ホワイトさんの声がよく通って聞こえるのは反響してるのかな、なんて狭い視界で部屋を見回す。辺りが暗いのでよくわからないが壁際に何人かのシルエットが見えた。

影は何かをこっそり話し合っているようで、自慢の地獄耳を澄ませても距離があるため詳しい内容がわからない。

かすかに聞こえる言葉の断片を頑張って拾ってみる。

「パッパッパー」「パパパラピルピ」

……………舌嚙まないんですか？

しばらくの間、私はパ行に侵略された謎の言語を必死に聞き取る
うとしていた。

未習得の他言語を聞き取るなんて私には無理だったんだ……と、
さすがに遠い目で諦念の抱いたころ、ふいに手を握られる。いきな
りでちよつとビビった。

見れば彼が優しく微笑んでいて、いつの間にかホワイトさんと
の話はまとまったらしい。

「大丈夫、一緒に行くよ」

何が大丈夫なのかは知らないが、彼が一步踏み出したのを見て私
も慌てて後に続く。

立ち上がって足を出した直後、薄氷が割れたような音がした。

「？」

なんだろうと辺りを見まわす。

あ、と今更気付いたが足下には小さい魔法陣？　のようなものがあって、うすぼんやりと輝いていた。私はちょうどその縁に立っていて、これが部屋の光源になっていたのだと納得。でも音には関係なさそう。

立ち止まった私を不安にかられていると思ったのか、今一度声をかけられる。

「大丈夫だよ」

手を引かれて、今度はそのまま陣を出た。

とたんに感じる肌寒さに、やはりあれは魔法陣か何かだったのだろうかと考える。陣の外は底冷えした空気で満たされていた。

ホワイトさんに先導されて部屋を出るとき、振り返った先で魔法陣の光が順序に消えていくのが見えた。

通路はそれ自体が淡く発光しているようで真つ暗闇にはならないのだが、それでも段々と見えなくなっていく視界の中。

気付かずに握り返した手は変わらず暖かった。

2、耳をすませばほら（後書き）

耳をすませばほら、謎言語。

3、二人きりの夜、そして引かれる腕、痛む頭

どうやら私たちが召喚されたのは真夜中であつたらしく、薄暗い部屋を抜けたあとは客室つばいところに通された。

仮にも年頃の男女、当然のごとく別の部屋になるかと思つたが召喚されるのは通常一人なので使える部屋は一つしかないらしい。ホワイトさんがたどたどしい日本語で説明してくれた。さっきの流暢な会話は、実はこっそり練習済みだったとかなんだろうか。一人で「ゆうさ、えつと勇者、さま、」とかどもりながら練習したんだろうか何それ可愛い。

ホワイトさんはとても申し訳なさそうにしてくれているが、言つてゐることはもつともで、そりゃそうだわなと声に出さずに納得する。急いで用意されたと思しきブランケットがあるだけでも、充分だと思わなくては。

パルプンテ、とホワイトさんは言つて部屋から出て行つた。一瞬ビクつてなつてしまった。なぜ今その呪文。

若干の静寂をはさんだ後、口を開こうとしたが私よりも彼の言葉の方が速かつた。

「明日、ちゃんと説明するからさ」

予想外に疲労した声音に驚いた。真後ろにいたのにまったく聞いていなかったが、ホワイトさんとの会話はそんなに壮絶なものだったのだろうか。

「だから、今日はもうちょっと休みたいかも」

休もう、ではなく休みたいと言つた彼に私は無言で賛同する。というか私に許可とらなくても勝手に休めばいいのでは。って、おい。

じゃあおやすみ、と言って当たり前のようにソファーに近づくと彼の腕を掴む。

「……え」

「……え、ってなんだ。」

疲れたんだろう？　そうこぼすと目を丸くして、そのあと少し赤くなった。

「おい、言っておくが一緒に寝るとかはないからな」

そう告げると今度はうるさくなる。

女の子なんだからとか、うんたらかんたら。

文句は総スルーでベッドまで引きずっていく。重い。

目標地点に到達したあたりでみぞおちに一撃入れようとしたが避けられた。

チッ。

「ちょ、待ってわかったから、ストップストップ！」

なおもしつこく急所を狙っていると、ようやく彼が折れる。

「わかったから！　俺がベッド使うから！！」

よっしゃ言質取った。

しぶしぶというように彼がベッドに入るのを見届けて、私もソファーに横になる。ブランケットも、一枚だけだが良いものなのか暖かいし、クッションもふっかふかで寝心地は以外と快適。

ゆっくりと目を閉じて、やがて眠りについた。

翌朝起きたら自分はベッドで、彼はソファで寝ていた。なんか負けた気分だ。

「……はよー」

起き抜けの髪を手櫛でとかしながら声をかける。

「起きろー」

返事がないので近寄ってみる。寝てる。
ゆさぶってみる。

「おーい朝だぞーい」

しばらくゆさゆさしていると、ぼんやりと見開いた瞳と目が合った。

起きたのか、と立ち上がろうとすると腕をつかまれる。

「寝ばけてんのか？……うおわっ」

腕をふりほどこうとした瞬間に強く引かれて、ソファの方に倒れ

こむ。彼のもう片方の手が私の背中に回されるのを横目に見つつ

二人してソファから転げ落ちた。少し遅れて、硬いものがぶつかるような鈍い音。

「……」

「……」

「……」

「うめん」

「……」

「いや、いきなり引つ張られてバランスとか普通とれないだろ」

「……」

「だからごめんって……頭は大丈夫か？ テーブルの足に思いつきりぶつけてたが」

「……おはよ」

返ってきた声に、なぜだか罪悪感。悪いのは寝ぼけてた向こうなのに何故だ。

立ち上がろうとするとまた引き寄せられる。なんなんだと顔を見ると、まだ寝ぼけてるって訳じゃなさそうだが怪訝な表情。訳わかんないのはこっちなんですが。

「んー、まあ服にかけとくか」

そして自己完結。

「何を服にかけるって？」

「とりあえずの保険だから、大したものじゃないよ」

よけいにわからん。

その後うだうだと二人して起き上がり、顔洗いたい……とか思ってた。ホワイトさんがやって来た。濡れた布を持って。ホワイトさんまじいい人。

3、二人きりの夜、そして引かれる腕、痛む頭（後書き）

パルプンテ：訳（ごゆっくりお休みください）
決して呪文ではなくただの挨拶である。

4、目が合った事実などなかった

ほどよく冷たい手拭いに喜んでいると、見たことのない腕輪を差し出された。

「なんだ？ その腕輪」

横から飛んできた声も私の内心とキレイにシンクロ。疑問を浮かべて彼女を見つめるも、逆にニコニコと見つめ返される。着けるってことなのかな。

象牙つばい質感の腕輪を左手に通してみる。

「その腕輪は魔道具の一種で、着けた者にかけられる補助魔法の効果を増幅してくれるんです」

紡がれたホワイトさんの説明は、昨夜と同じように流暢だった。

「言葉……」

ふふ、と柔らかく微笑んで彼女は右手を掲げる。細い手首には、これまた細い銀の二連ブレスレットが。内側の青い装飾がチラリズムで綺麗。

「実はこれは『疎通そつうの双環そうかん』という魔道具で、使用者と会話している相手双方の内心を読みとって翻訳してくれるものなのですが、昨日はこれを着けていたにも関わらずあまりうまく会話できなくて」

あーたどたどしかったね、と思い出す。

「歴代の勇者の中には魔法が効きづらい体質の方もいましたし、きっと今回もそうなのだろうと思います。言葉が通じないままでは不便なので、そちらの補助魔法を増幅する腕輪をお持ちしました」

なるほど、そう繋がってくるのか。

白い腕輪の表面をなでるとわずかな凹凸があることに気付く。彫りこまれた模様が年月と共に磨り減ったのだろうか、すごいアンティーク品を貰ってしまった。

彼も見たことがないものなのか、二人してまじまじと白い腕輪を眺める。

そんな私たちを見てホワイトさんもふわりと微笑し、続けた。

「それから、本日の予定ですが、朝食のあとお召し替えしていただき、その後陛下と謁見になっています。現状の詳しい説明も、その場でさせていただきます」

「わかった」

彼が簡潔に答え、ホワイトさんは退出していく。

ご飯を食べる前には着替えないのかと思っていたら、そのうち部屋に料理が運ばれてきた。なるほどここで食べるのね。

料理はおおむね普通のものだった。おおむね、という言葉通りに時たま青かったり動いてたり目が合ったりするのが紛れていたが。そういうのは手をつけずにスルーする。うん。私は何も見ていない。だから謎の物体Xと目が合ったりもしていない。うん。

さて次はお着替えか、と考えたところでふいに左手を取られた。いや、正確にいうなら左手の腕輪を。

「ただのさらなる保険だよ」

起きた時と同じように笑う彼に疑問を抱くのも疲れてきてスルーしてやる。もういいよ、思わせぶりたい年頃なのよねハイハイ。私は昨日から頭がパンクしそうだよ。

完璧に無視された形になった彼が視界の片隅で拗ねてるのを気付かないフリでやりすごしつつ、案内にきたメイドさんの後について行く。

謁見という言葉のイメージに、スカートの下にフレームが付いてるドレスとかでなければいいなあ、なんて遠い目をして。

結論、ドレスはフレーム付きではありませんでした。そもそもドレスというか普通の白いワンピースでした。それでも充分レースやらフリルやら付いてましたけども。

ちなみに我が幼馴染とは着替えた後に合流したんだが真剣に吹き

出しそうになった。一番近い服を上げるなら白い学ラン。通称白ランと呼ばれるアレ。それにちよいちよい金具のついた組み紐とかピンとかが付いてる。でもベースは白ラン。正直コスプレにしか見えない。決して似合わない訳ではなく、むしろ「顔がいいってお得」が納得なのだが。でも、でもさ、似合ってるからこそ笑いたくなることって、あると思うんだ。実際は笑わなかったけど。頑張ってたけど。

普通はだいぶ失礼な反応だがこれは失礼にはあたらない。なぜなら向こうも笑いを堪えていたのを知っているからだ。隠してるみたいだったが、何年幼馴染をやつてると思ってるんだ。口元ちよつとにやけてんぞ。どうせ避暑地のお嬢様風白ワンピなんて、私にはレベルが高すぎたんだ。ちくせう。

「こちらが謁見の間になります」

ホワイトさんから声がかけれ、大きな扉の前で立ち止まる。

彼を見るとさすがに緊張しているのか、さきほどのにやにや顔とは一変して顔をこわばらせていた。

立ちつくす私たちの前で、ゆつくりと扉が開いていく。

謁見が、始まる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8227x/>

Wandering Trip

2011年11月24日11時45分発行